



TITLE:

社会主義貿易論(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

鈴木, 重靖

CITATION:

鈴木, 重靖. 社会主義貿易論. 京都大学, 1968, 経済学博士

ISSUE DATE:

1968-07-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212905>

RIGHT:

【 21 】

| | |
|---------|-------------------|
| 氏名 | 鈴木重靖 すずき しげ やす |
| 学位の種類 | 経済学博士 |
| 学位記番号 | 論経博第22号 |
| 学位授与の日付 | 昭和43年7月23日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当 |
| 学位論文題目 | 社会主義貿易論 |

論文調査委員 (主査) 教授 松井 清 教授 大橋隆憲 教授 田中真晴

論文内容の要旨

I 本研究の基本視角

本研究は、社会主義的生産関係が、国際間ではどのようにあらわれるかを、主として国際貿易という形式を通して研究したものであるが、この場合の基本視角は次のようなものである。(1)社会主義社会は、旧社会の母斑を残した共産主義社会への過渡期として把握されるが、このことが国際関係ではどのような意味をもつか。(2)資本主義的国际関係においては、国内の諸法則は国際間では一定の修正をもってあらわれるが、社会主義的国际関係の場合はどうか。そしてその内容はどのようなものであるか。(3)資本主義的国际関係において妥当していた国際貿易や外国為替にかんする諸理論が、社会主義的国际関係においてはどの程度妥当し、どの程度否定され、あるいは修正されるのか。

(1)にかんしては、社会主義社会は、旧社会の母斑をもつが故に、国家および国民経済、国家的所有と集团的所有、価値ならびに価格、貨幣および信用等の旧社会（主として資本主義社会）の経済的カテゴリーをもっている。だが社会主義社会の基本的経済法則は、資本主義社会の基本的経済法則とは本質的に異なり、母斑にみられる形式的類似性に目をうばわれ、この本質的な相違性を見落してはならない。

(2)にかんしては、社会主義的国际関係においても、社会主義社会の国内に妥当している諸法則や諸矛盾が、国際間でもそのままの形や内容であらわれるものでなく、一定の修正をもってあらわれるということである。たとえば、基本的経済法則について、社会主義国同志の経済関係でも、そのまま直接的にあらわれるものでなく、間接的な形であらわれざるをえない。社会主義社会に特有な計画的性格も、国際間では一元的な直接計画ではなく、多元的な調整という形をとらざるをえない。また価値法則や価格法則も、社会主義国際間では国内のそれとは違って修正されてあらわれる。

(3)にかんしては、比較生産費説、国際価値論、為替相場と金、先進国と後進国の関係等多々あるが、たとえば比較生産費説は、一方では社会主義貿易の効率原理を通してあらわれてくる。他方のこの法則は、絶対的なものではなく、それぞれの社会主義国民経済の社会主義工業化の原理に従属する。国際価値論そ

の他も、一方では資本主義的国際関係と共通して妥当する面をもっているが、他方ではこれを制約し、修正する面をもっている。このことは、社会主義社会が、一面では共産主義的性格をもっており、他面では旧社会（資本主義社会、したがってまた資本主義的国際関係）の母斑をもっている社会であるということからくる必然的結果である。

II 本研究の構成

本研究は6章からなる書物にまとめられており、その各章の要旨はつぎの通りである。

第1章——社会主義社会の主要特徴をのべたのち、何故社会主義社会では外国貿易が必要なのか、その特徴はどこにあるかが論じられている。これを明確にするために、資本主義貿易との対比が、表面には出ていないが、基礎的には考えられているものと思われる。その方法は効果的な方法である。

第2章——社会主義貿易が実際に行なわれた歴史的経過と現状が、貿易の国家独占という面から論述される。またこの点に関するソ連や東欧の経済学者たちの見解に対する批判がおこなわれ、かつ積極的な見解がのべられている。

第3章——社会主義貿易と価格論である。ここでは、まず国際価値論が論じられる。社会主義世界市場における国際価値の本質を究明し、資本主義世界市場における国際価値との相違が明らかにされる。国際価格論についても、同様の方向で研究がおこなわれている。

第4章——まず社会主義経済における国際決済の現状についての紹介がおこなわれる。すなわち金、ルーブル、為替相場の理論的解明である。金の機能については、社会主義社会は対外的機能が中心であり、対内的機能は事実上名目的なものという見解を明らかにしている。ルーブルと金含有量と為替相場の関係については、結局ソ連における金の生産性や国内価値を基盤としてルーブルの金含有量や為替相場をきめることは誤っていることが理論的に解明されている。

第5章——ここで論じられている外国貿易の効率（収益性）問題は、現代社会主義諸国で外国貿易にかんする問題として、もっとも中心的な位置を占めているものである。本研究はこれまで社会主義諸国の論者によって展開された理論を整理体系づけたものである。整理は輸出効率、輸入効率、それに総体的あるいは絶対的効率にわけておこなわれた。恐らく、このように明確にかつ詳細に整理体系づけたものはソ連や東欧でもないのではないかとおもわれる。

第6章——社会主義貿易が、一国の立場からではなく、多数国を含む全体的関係から展開される。そしてさらに外国貿易という枠をこえて、生産の専門化、協同化、国民経済の相互調整へと進んでゆく。最後に現代の社会主義国家間の経済関係をもっとも総合的、具体的に組織したものとしてコメコンが論じられている。

論文審査の結果の要旨

社会主義国が複数となり、相互の間に国際貿易がおこなわれるようになったのは、第二次世界大戦以後であり、せいぜい20余年を経過したにすぎない。したがって社会主義貿易を研究した業績も、ソ連や東欧においても、まだ数えるほどしかなく、数冊の著書と、それよりも多い若干の論文があるにすぎない。鈴木重靖氏は、これまでの世界経済理論を十分消化した上で、この全く新しい研究分野に開拓の手をさしの

べた。主としてソ連、東欧の文献を紹介した上で自己の独創的な見解を明らかにしている。

諸文献の紹介は正確であり、それに関して展開している自己の見解は、おおむね妥当と考えられ、専門学会における評価もなかり高いものがある。

本論文は経済学博士の学位を授与するに値するものと認定する。